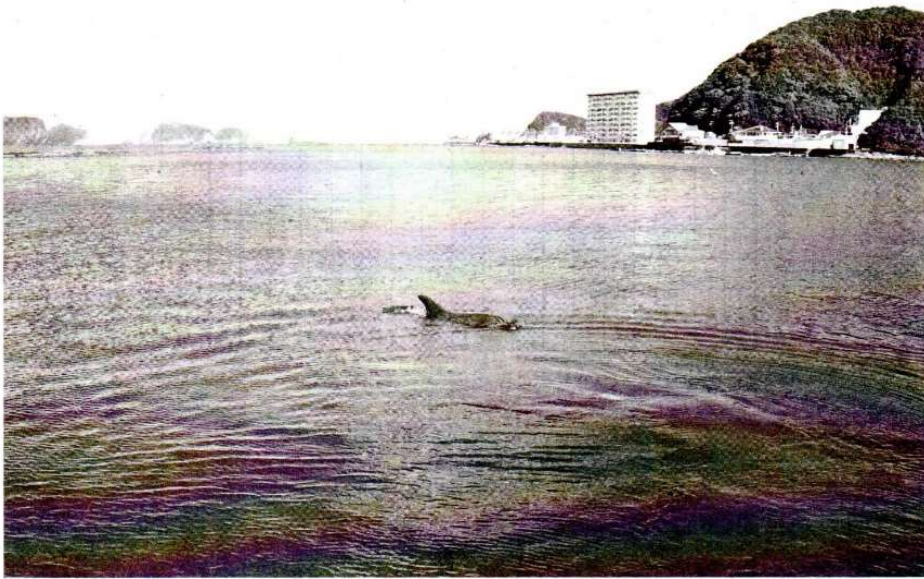


太地町の森浦湾に迷い込んだイルカ—令和元年12月



何者で、何をしに来たのか

森浦湾の迷いイルカ①

クジラの仲間は約90種類知られていますが、沿岸を好む種もいれば、沖合を好む種もいます。また、暖かい低緯度海域を好む種もいれば、寒い高緯度海域を好む種もいます。中には、熱帯から極域を大回遊するクジラも知られています。それこそ、鯨類全体を見れば、世界中の海に広く分布しているのです。特に、島国の日本において、海洋に面する地域であれば、どこでも、クジラと遭遇するチャンスがあるのです。

少しさかのぼりますが、2019（令和元）年11月30日のこと。太地町が約100頭の小型鯨類を飼育管理する森浦湾で、飼育するいずれとも異なる、1頭のイルカを発見しました。このイルカを確かめようと、試みに飼育員が餌のサバを投げ与えてみましたが、食べません。

人を見るなど興味はありそうですが、一定の距離を保つまま近づきません。どうやら、飼育されていたイルカではなく、野生のイルカの可能性があります。本来の生息域から離れた場所に迷い込むことを「迷入」と言いますが、このイルカも、その類かもしれません。

この迷いイルカは、翌日からもちよくちよく姿を見せました。私たちは種類を特定しようと観察を続けましたが、普段からイルカを見慣れているはずの飼育員でさえ考えこむほどでした。イルカとしては大きな体形と灰色の体色は、水族館でなじみ深いバンドウイルカに見えます。一方、比較的長いくちばしと胸びれの形状は、バンドウイルカと近縁種のミナミハンドウイルカにも見えます。しかし、ミナミハンドウイルカの腹面に出現する、この種特有の黒斑模様の観察が不十分で、種判別には至りませんでした。

そこで、DNAを用いた遺伝子解析による種同定（種の特定）も視野に入れました。解析には、排泄された便や、剥がれ落ちた表皮が必要ですが、迷いイルカの正体を暴くため、イルカの後を追ったり、水面に目をこらしたりと、落とし物探しが始まりました。

太地町は、餌となる水産資源が豊富で、岸のすぐ近くから深くなるため、多くのクジラが来遊し、その地域性から「クジラが昼寝をしに来る場所」と言われています。この迷いイルカは、一体何者で、何をしに来たのでしょうか。

（太地町立くじらの博物館副館長 稲森大樹）